

# 幸せ 自在

被災地のあなたと ①

気仙沼のアトリエ

## 「腹巻帽子」で雇用を元気を

マフラーにも、腹巻にも、帽子にもなるオリジナルの「腹巻帽子」を編む梅村マルティナさん(京都市中京区)



民宿の一室を借りたアトリエ。機械を使った「腹巻帽子」づくりが進む(宮城県気仙沼市) 梅村さん提供

ドイツ出身の梅村マルティナさん(53)は京都府中京区にこの春、20年以上住み続ける京都市から宮城県気仙沼市に住民票を移した。自身が考案したニット製の「腹巻帽子」を製造販売する会社も現地に設立。腹巻ぎや帽子、マフラーとして多用途に使えるこの帽子で、被災地を元気づけたいと願う。

### 住民票も移し会社設立

もっと送って…

書類上の話とはいえ、夫や10代になったばかりの2人の子ともと離ればなれになる道を選んだのは覚悟の証だ。「より責任のある形で支援したかったんです」。これで税金も被災地に納められると笑顔を見せた。

困難だったためだ。ただ、時間的には余裕ができ、編み物を再開。何も考えず編み棒を握るひとときは大きな喜びとなっていた。

だからこそ、東日本大震災の直後、支援物資を送る京都の知人に頼み込み、毛糸と編み棒のセット100個を託した。「水

になるものを作りたいと思いついた。そこで生まれたのが、8本足で幸せをつかむタコの編みぐるみ「小原木タコちゃん」。小原木の仮設住宅の女性が作るまん丸な瞳の愛らしい姿は反響を呼び、手作り市などでの販売を通して収入源にもなった。

今、海辺の民宿の一室

今、海辺の民宿の一室

や食料が足りないという時でしたが、悲しみを忘れるために何かしたいという人もいるはずだと信じていました。

み出せないか。女性が一家を支えられるだけの収入になる仕事を被災地で作りたい。そんな願いを込めてつくったのが、自身の名前を冠した株式会社「梅村マルティナ気仙沼F.S.アトリエ」だ。

を借りたアトリエで3人の女性が働く。社員の1人、伊藤紀子さん(38)は「何かすることがあるという事は本当に幸せ。仕事ができる環境に感謝したい」と話す。

に今できることをしたい。その気持ちでこまめに走ってきた。在庫管理に膨大な書類。慣れない会社経営は思ったより大変だが、透明性があって社員が平等で、楽しく働ける会社をつくりたい。時給も上げたい。「雇用をもっと増やして、保育所や児童保育もついたアトリエで皆で楽しく仕事ができればいいなと思います」

梅村さんが掲げた雇用の条件は、子育て中の人▽被災した人▽気仙沼に就任した。

子どもたちをドイツに帰すことも考えていた震災直後、まさか自分が被災地で会社を経営するようになるとは想像もしていなかった。あの頃、「友だちを真切れないよ」という子どもの声を聞いて逆に気持ちが固まった。「私たちはこの国に住み続けるのだ」。ならば、子どもたちの将来のため

(太田敦子) 連載おわり